

名古屋城の天守復元議論

名古屋城と名古屋市は天守木造復元だけでなく、障害に対する差別発言で揺れ動いている。名古屋に住んでいた頃から気になっていたが、名古屋城復元のあり方について、城郭考古学者の千田嘉博氏が朝日新聞 23 日朝刊「千田先生のお城探訪」で表題について述べているので抜粋して紹介する。

「史実に忠実な復元」というと、天守などを江戸時代の設計・設備のままに復元するとイメージする。しかしそれには問題がある。過去の設計・設備は、現在の建物に求められる耐震強度や防火性能、防煙区画も、二方向避難の要件も満たさない。江戸時代のままに天守を復元したら、誰も中には入れず、史跡として活用できない。

「史実に忠実な復元」が大事だから、誰も入れなくてよいという意見がある。しかし史跡における建物の復元は、史跡の本質的価値を顕在化して活用するための真に必要な措置として行うのだから、適切な活用が出来ない復元はそもそも認められない。

それでは、これまで史跡における建物の復元はどうしてきたか。史跡の復元建物では内部に人が入って歴史を体感するために、コンクリートの建物基礎を設け、鉄骨で躯体を支え、補強金具を加えて耐震強度を担保し、電気や水道を通してスプリンクラー配置し、防煙垂壁を設けた。そして本来の階段とは別に実際に見学者が上り下りする階段を、現在の法規に合致させていくつも新設して動線の適切さを満たした。

意外かもしれないがそうした改変を含んで出来た復元建物が今日の「史実に忠実な復元」なのである。つまり「史実に忠実な復元」とは、外観の意匠や柱の位置、材質などを学術的研究成果によりながら旧状のように復元する一方で、見学者の安全を確保して文化財として活用するための必要な措置をとることをいう。

そして史跡を含めた文化財は広く国民共有の財産であるから、適切なバリアフリー化を実施するのは、議論の余地なく当然である。史跡は健常者だけのものではない。

だから「史実に忠実な復元」における史実性は、史跡にふさわしい活用実現のための改変とグラデーションの関係になっていて、0 か 100 かで考えてはいけない。この点、名古屋市は「史実に忠実な復元」とバリアフリー化を二項対立するものとして説明をくり返してきたため、深刻な市民の分断を招いた。名古屋市が説明の誤りを認めて出直すことなしに、議論の正常化は難しい。

そして朝日新聞にも猛省を求めたい。奈良県の大和郡山城の本丸の橋や香川県の高松城の桜御門のようにバリアフリー化を無視した復元建物の完成を朗報として報じ、問題が表面化した名古屋城だけを論じる姿勢でよいか。今、わたしたちの国で進行している大きな問題を俯瞰して論じなければ、新聞報道への期待はしぼむ。

(2023 年 6 月 25 日)